

「由緒沿革誌 其ノ五・七」の翻刻と平安義会の宣誓式 および明治天皇御大喪

―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介（七）―

下 川 雅 弘*

Introduction to Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) for the Study of Kyoto-kanke-shizoku (Ⅶ)

Masahiro SHIMOKAWA*

Abstract

The term Kyoto-kanke-shizoku refers to the low-level functionaries who served in the Imperial Court until 1869. They became unemployed and impoverished as a result of the Meiji Restoration. The organizations Heian-gikai and Kyoto-Ohkitsu-zaidan were founded to support them. Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) are the materials handed down from generation to generation in these organizations. In 2016, these materials were donated to the Kyoto Institute, Library and Archives. This text was written to introduce them for being used in the study on the Kyoto-kanke-shizoku.

はじめに

本稿は、近世以前において朝廷に出仕していた官家士族について、その近代以降の動向の解明に資するため、京都府立京都学・歴史館所蔵『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の一部を、逐次翻刻・紹介することを目的としている。^①その(七)となる今回は、同史料群のなかから、とくに平安義会の宣誓式および明治天皇御大喪に関する史料を取り扱う。

平安義会とは、官家士族の救済等を目的とする団体で、京都在住の旧官家士族総代たちを中心として明治二十四年(一八九一)五月に設立された。^②明治二十六年(一八九三)七月には、京都在住の伊丹重賢を会長とするともに、平安義会は宮内省に公認され、同年十月に官家士族の子弟を教育する平安義校の廃止が決定すると、平安義会は官家士族の子弟に対して奨学事業を展開する団体としての性格を確立していく。^③伊丹会長の死去にともない、明治三十三年(一九〇〇)七月に、同じく京都在住の尾崎三良が会長となると、平安義会の社団法人化が目指され、明治四十二年(一九〇九)六月にその認可を受けた。^④また、同年十二月には、官家士族の別団体である京都桜橋財団も設立される。^⑤以上は拙稿を含むこれまでの研究において明らかにされている。^⑥

さて、少し時間を戻すが、尾崎三良が会長となり社団法人化を模索し始めていた明治三十四年(一九〇一)五月十二日、平安義会の奨学事業が、明治十二年(一八七九)の明治天皇からの御貸金三万円や、

その後数度にわたる下賜金のおかげであること、加えて設立から十年を迎えた平安義会による奨学事業の意義と成果を、官家士族とその子弟たちに周知するため、同会は第一回宣誓式を開催した。なお、平安義会の宣誓式は、明治三十六年(一九〇三)十月十八日に第二回が行われたことは確認できるものの、その後の開催については定かでない。また、大正元年(一九一二)七月三十日に明治天皇が崩御すると、同年九月十三日の東京における明治天皇御大喪に続く翌十四日の伏見桃山陵への埋葬において、平安義会会員に相当の御用命をいただきたいと願い出て、同会からは二十五名の供奉が認められた。なお、大正三年(一九一四)の昭憲皇太后御大喪に続く伏見桃山東陵への埋葬においても、平安義会から数名の供奉が認められている。以上紹介した平安義会の宣誓式や、平安義会の明治天皇・昭憲皇太后御大喪への関わりについては、拙稿を含むこれまでの研究で検討されたことがない。

本稿では、平安義会の宣誓式に関する明治三十四年(一九〇一)から明治三十七年(一九〇三)の史料を綴込んで簿冊とした、『平安義会資料』所収「由緒沿革誌 其ノ五」、および明治天皇御大葬等に関する大正元年(一九一二)から大正三年(一九一四)の史料を綴込んで簿冊とした、『平安義会資料』所収「由緒沿革誌 其ノ七」の一部を翻刻・紹介し、平安義会が開催した宣誓式や、平安義会の明治天皇・昭憲皇太后御大喪への関わりについて、あらたな情報を提供したい。

一 『平安義会資料』所収「由緒沿革誌其ノ五・七」の構成と解題

まずは、『平安義会資料』所収「由緒沿革誌其ノ五」および「由緒沿革誌其ノ七」それぞれの冒頭に記載された目録を引用する。

「由緒沿革誌其ノ五 宣誓式ニ関スル書類」

目録

- 壹 宣誓式当日報告書
- 貳 宣誓執行名簿
- 参 学生々徒及保護者通知名簿
- 四 来賓名簿
- 五 役員名簿
- 六 其他雜書

「由緒沿革誌其ノ七 御大葬ニ関スル書類」

目録

- 壹 惻願書
- 貳 七月二十日 日出新聞号外
- 参 御通夜之義ニ付惻願
- 四 上申
- 五 御大葬御用待命者撰抜方針
- 六 同 辞令御請書
- 七 御靈柩奉拝人名

八 総会延期ノ通知

九 皇太后陛下御大葬ノ供奉請願書提出ノ件

壹〇 遙拝祝詞

壹壹 大喪儀桃山坂停車場陵所間鹵簿

これらに綴られた膨大な書類のなかから、本稿では、平安義会の宣誓式や、平安義会の明治天皇・昭憲皇太后御大喪への関わりを検討する上で、特に重要と判断した二十一点の史料について、その全文を翻刻・紹介したい。なお、翻刻に当たっては、原則として旧字を新字に改めている。それぞれの史料についての解題は、以下の通りである。

(一)の「宣誓式開催通知」は、明治三十四年（一九〇一）五月十二日午前九時から挙行予定の平安義会宣誓式について、同会会長尾崎三良名により同年五月付で出された開催通知である。活字印刷されており、宛名の部分は切り抜いて空欄となっている。

(二)の「宣誓式出頭通知」は、明治三十四年の宣誓式について、平安義会の役員に対し、当日午前八時に参集するよう同会副会長代理・幹事の増沢季の名により同年五月七日付で出された出頭通知である。活字印刷されており、宛名の部分は切り抜いて空欄となっている。

(三)の「学生宛宣誓式開催通知」は、明治三十四年の宣誓式について、特定の貸給費学生十名に対し、当日午前九時に参集するよう同会副会長代理・幹事の増沢季の名により同年五月八日付で出された開催通知である。

(四)の「総代議員宛宣誓式出頭通知」は、明治三十四年の宣誓式

について、平安義会の総代議員に対し、当日午前八時に参集するよう同会副会長代理・幹事の増沢季の名により同年五月八日付で出された出頭通知である。なお、宣誓式およびその前後における段取りが、簡条書きで示されている。

(五)の「宣誓式順序」は、宣誓式の式次第であるが、年月日未詳のため、明治三十四年と三十六年いずれの宣誓式のものであるかは不明である。

(六)の「宣誓式会長訓示」は、明治三十四年の宣誓式における会長の訓示である。

(七)の「本莊謙三郎答辞」は、宣誓式会長訓示に対する学生生徒総代本莊謙三郎の答辞であるが、年月日未詳のため、明治三十四年と三十六年いずれの宣誓式のものであるかは不明である。

(八)の「宣誓式当日報告」は、宣誓式当日における貸給費生の報告であるが、年月日未詳のため、明治三十四年と三十六年いずれの宣誓式のものであるかは不明である。

(九)の「平安義会沿革」は、明治三十四年の宣誓式に際し、平安義会の沿革について、同会幹事の増沢季が宣誓式当日の同年五月十二日付で叙述したものである。

(十)の「会長宛宣誓式御臨席願」は、明治三十六年（一九〇三）十月十八日に挙行予定の平安義会宣誓式について、同会会長尾崎三良の臨席を、幹事長増沢季が同年九月付で願ひ出たものである。

(十一)の「浅田暢一答辞」は、明治三十六年の宣誓式会長訓示に対する浅田暢一の答辞である。

(十二)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付日記」は、大正元年（一九一二）九月十三日の明治天皇御大喪に当たって、同年七月二十日から九月三日に至る平安義会の動向を書き留めた日記である。

(十三)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付惻願書」は、明治天皇御大喪において平安義会会員に相当の御用命をいただきたいと、大正元年八月四日付で同会会長服部保親が宮内大臣渡辺千秋に宛てた惻願書である。

(十四)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付報告書」は、明治天皇崩御に際し、平安義会と京都桜橘財団の理事・評議員等が、大正元年八月四日に奉詔式・遙拝式を執行したことについて、平安義会会長服部保親と京都桜橘財団理事長小森猷次が、同日付で平安義会副総裁男爵尾崎三良に宛てた報告書である。

(十五)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付御高配願」は、明治天皇御大喪において平安義会会員に相当の御用命を求めた件について、同会副総裁尾崎三良の御高配を賜りたいと、大正元年八月十日付で同会会長服部保親を含む理事八名が、連署により願ひ出たものである。

(十六)の「明治天皇御大喪御用待命者撰抜方針」は、平安義会会員のなかから、明治天皇御大喪の御用待命者を選抜する方針について取り決めたものである。なお、畑道名以下多数の署名がなされているが、紙幅の都合により翻刻ではこれを省略した。

(十七)の「明治天皇御通夜ノ義ニ付惻願」は、明治天皇御通夜（殯宮祇候）について、平安義会代表者一両名の祇候許可を、同会会長服部保親が大正元年八月十二日付で宮内大臣渡辺千秋に願ひ出たもので

ある。

(十八)の「明治天皇御通夜ノ義ニ付指令第九号」は、平安義会代表者による殯宮祇候の不許可が、宮内大臣渡辺千秋名により大正元年八月十五日付で伝達されたものである。

(十九)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付上申」は、明治天皇御大喪の御用待命者となり得る旧禁裏御内(平安義会会員)の総数などについて、服部保親等四名が大正元年八月二十九日付で京都府知事大森鍾一に提出した人員調書である。

(二十)の「昭憲皇太后御大喪ノ義ニ付惻願書」は、昭憲皇太后御大喪において平安義会会員に相当の御用命をいただきたいと、大正三年(一九一四)四月十五日付で同会会長服部保親が大喪使長官波多野敬直に宛てた惻願書である。

(二十一)の「昭憲皇太后御大喪ノ義ニ付答弁願」は、昭憲皇太后御大喪の御用待命者について、各部(第一部から第七部)より公平に選抜されていない理由の説明を求めるために、小島秀次郎等六名が大正三年五月十一日付で平安義会理事に宛てた答弁願である。

二 史料の翻刻

(一)「宣誓式開催通知」

拝啓薄暑ノ候、益御清福奉賀候、陳者本会ハ曩ニ二会員子弟教育基金トシテ下賜金ヲ辱フシ、去ル廿六年勸学部ヲ置キ、学資貸給ノ方法ヲ設

ケ、専ラ奨学ニ努メ候処、学生々徒ノ数漸次増加シ、現今其数千有余名ニ達シ候ニ付、本年ヨリ中学已上ノ学生々徒ヲシテ

聖旨ノアル所ヲ知悉セシメン為メ、来ル十二日午前九時本会ニ於テ宣誓式挙行致候ニ付、奨励ノ為御繰合セ、御来会被成下度、此段御案内申上候也、

明治三十四年五月

平安義会々々長

男爵 尾崎三良

「」殿

(二)「宣誓式出頭通知」

拝啓、陳者本会々員ハ子弟教育ノ基金トシテ数万円ノ下賜金ヲ辱フシ、去ル廿六年勸学部ヲ置キ、上大学ヨリ下小学ニ至ル迄、各種学校ニ就学スル会員子弟ノ学資補助トシテ貸費、給費ノ方法ヲ執行候処、右学生々徒ノ数月二年ニ増加シ、現今ニ至リテハ其数千有余名ニ登レリ、依テ本年ヨリ中学以上ノ学生々徒ヲシテ、

聖旨ノアル処ヲ知悉セシメ、尚ホ本会ノ基礎ヲ鞏固ナラシメン為メ、会長尾崎男爵親シク臨場宣誓ノ式典ヲ挙行候ニ付、来ル十二日午前八時本会へ出頭可有之、此段及御通知候也、

明治三十四年五月七日

平安義会副会長代理

幹事 増沢季の

「殿
殿

〔三〕「学生宛宣誓式開催通知」

拝啓、陳者今般本会ニ於テ、大学以下中学并ニ同等学校之貸給費学生々徒ニ対シ、宣誓式ヲ執行可致事ニ相成候、依テ本月十二日午前九時會長臨席挙式被致候ニ付、御参列相成度、此段御案内ニ為得貴意候、勿々敬具、

追テ宣誓文ハ、別紙之通ニ在之候間、忝葉御配附ニ及候、

明治卅四年五月八日

平安義会副会長代理

幹事 増沢季的

工学士 松室重光殿

工学士 眞他倍造殿

法学士 富嶋元治殿 粕勇三郎殿

大国弘吉殿

三宅俊之助殿

河野通造殿

角田隆殿

中大路正雄殿

柏村猪三郎殿

〔四〕「総代議員宛宣誓式出頭通知」

拝啓、陳者本会宣誓式ハ、来ル十二日午前九時執行ノ事ニ相成候、就テハ左ノ件々、及御通知候、尚当日ハ午前八時迄ニ、各員出席之事ニ申合セ相成居候間、乍御苦勞全時齎迄ニ、御出席御幹旋被下度希望度候、

一會長尾崎男爵ハ、本月出発、海路神戸ニ到リ、昨日午後六時五十分、京都七条着ノ旨、今般通知有之候、就テハ幹事議員共可成繰合セ、停車場迄出迎フヘキコトニ臨テ、申合セニ相成度候、但シ兼岡宅ニ休憩所ヲ取設ケ置候、

一來賓トシテ知事、視学官、大学、高等、中学、其他二三学校長、並ニ市長、新聞記者等招待之事ニ相成度候、

一宣誓スヘキ生徒ハ、中学並ニ全等学校以上ノ学生々徒ニ対シ、執行可致事ニ決定致度候、

一會長就任後始メテノ臨会ニ候ヘハ、当日式撤退ノ後、聊カ宴会ヲ開催ノ事ニ限、議得ニ有之候間、可成御繰合セ御出席有之度候、万一御差支ニテ御不参之時ハ、以後十日中二本会ニ到着候様、其旨御通知有之度候、

三十四年五月八日

副会長代理

幹事 増沢季的

総代議會前会不参

各議員足下

〔五〕「宣誓式順序」

宣誓式順序

- 一 役員学生々徒入場
 - 二 来賓入場 幹事先導一同敬礼
 - 三 開扉 一同最敬礼
 - 四 唱歌（君力代）合唱
 - 五 勅語奉読 会長
 - 六 閉扉 一同最敬礼
 - 七 宣誓文朗読 会長
 - 八 学生々徒総代答辞
 - 九 会長演説
 - 十 来賓演辞
 - 十一 幹事本会貸給費生二関スル報告
 - 十二 本会出身者演辞
 - 十三 一同敬礼 順次退場
- 右

〔六〕「宣誓式会長訓示」

本会々員ハ先祖以來永ク輦轂ノ下ニ在テ、皇室ト浅カラザル因縁アリ、是ヲ以テ去ル明治十二年授産金トシテ宮内省ヨリ金若干万円ノ恩貸アリ、其後明治廿一年更ニ該基金ヲ以テ、教育費トシテ下賜セラル、ノ

恩命ニ接シ、猶又明治三十年ニ至リ、更ニ金若干万円ノ増賜ヲ蒙ムル、是レ固ヨリ

聖旨ノ優渥ナルニヨルト雖モ、亦祖先ノ勤功アルニアラスンハ、豈ニ如斯ノ高恩ニ浴スルヲ得ンヤ、本会々員ヨリ出テ、学生々徒タル者、宜シク日々優渥ナル 聖恩ニ感佩シ、学徳ヲ磨キ、他日成業ノ上ハ、高恩ノ万一二報センコトヲ期スヘキナリ、今宣誓式ヲ行フニ当リ、左ノ三條ヲ訓示ス、
明治三十四年四月^(マ)

平安義会々長男爵尾崎三良

第一條 皇室ノ高恩ヲ奉体シ、能ク教育勅語ノ大旨ヲ遵奉シ、忠勇、孝悌、友愛ノ道ヲ守リ、勤儉、謙讓、質実ノ徳ヲ養ヒ、以テ他日報効ノ大義ヲ尽スヘキ事、
第二條 会員ノ体面ヲ重シ、各自ノ修養ヲ努メ、開物成務ノ要ヲ考ヘ、国利民福ノ増進ヲ謀ルヘキ事、
第三條 成業ノ上ハ、本会ノ恩義ヲ顧ミ、其継続隆盛ヲ期図シ、並ニ後進者ノ指導誘掖ニ尽力スヘキ事、
右條々堅ク相守ルヘキ事ヲ誓フ、

〔七〕「本莊謙三郎答辞」

答辞

唯今会長閣下ヨリ御訓示ノ趣キ拝聴仕リ、吾々学生一同ハ深く御主旨ヲ奉戴シテ、日夜之レニ悖ラザラン事ヲ誓上マス、右一同二代リ御答

辞上マス、

京都帝国大学医科大学々生

本莊謙三郎

(八)「宣誓式当日報告」

宣誓式当日報告

本会々員子弟ニ学資ヲ補助スルノ法ハ、之ヲ大別シテ給費、貸費ノ二部トス、

一給費ハ山城国内ニアル小学校、中学校、并ニ商業、美術工芸各学校、及高等女学校ニ就学ノ生徒ニ限ルモノトス、

一既往拾年間ニ於ケル給費ヲ受ケタル生徒ノ総数ハ、千七百九拾余名ニシテ、之ヲ細別スレバ、

・尋常小学校ハ七百余名内卒業五百拾余名、半途退学百九拾余名、但シ該校ノ給費ハ、卅三年十二月限廃止セシヲ以テ、現今在校生ナシ、

・高等小学校ハ七百参拾余名内卒業三百四拾六名、半途退学貳百余名、在校百八拾余名、

・高等女学校ハ八拾七名内卒業廿九名、半途退学四拾貳名、在校拾六名、

・中学校ハ貳百四拾余名内卒業六拾九名、半途退学六拾名、在校百貳拾名、

・商業学校ハ拾五名内卒業五名、半途退学三名、在校七名

・美術工芸学校ハ六名、卒業生、半途退学生、現在生各貳名、

一貸費ハ各帝国大学、各高等学校、并ニ東京、神戸各高等商業学校、

東京工業学校、京都高等工芸学校、京都府立医学専門学校、陸軍中央、地方各幼年学校、私立日本女子大学校、海城学校、海外留学生等ナリ、

一既往拾年間ニ於ケル貸費ヲ受ケタル生徒ノ総数ハ九拾八名ニシテ、之ヲ細別スレバ、

・帝国大学ハ廿壹名内学位ヲ得タルモノ拾壹名、半途退学壹名、在校九名、

・高等学校ハ三拾九名内卒業拾九名、半途退学九名、在校拾壹名、

・京都府立医学専門学校ハ拾四名内卒業九名、半途退学壹名、在校三名、

・海城学校ハ五名内壹名海軍士官、半途退学三名、在校壹名、

右ノ外、各高等商業、東京高等工業、京都高等工芸等ノ各官立学校、并ニ日本女子大学、成城、明治法律、東京専門、慶応義塾等ノ各私立学校ハ壹貳名、若シクハ数名ノ貸費生アリタルモ、少数ナルト已ニ貸

費ヲ廢シタル学校アルトヲ以テ之ヲ略ス、而シテ目下出身ノ重ナル者ヲ挙レバ左ノ如シ、

内八名 高等官
三名 会社技師

・各科学士 拾壹名

・米国文学博士 壹名

・陸海軍武官 拾壹名

・官吏 拾名

・開業医 七名

・実業ニ従事スル者 五名
右

〔九〕「平安義会沿革」

本会々員ハ祖先以來京都ニ在住シ、終始帝室ニ奉仕シタル所謂官家士族ヲ以テ組織セリ、今本会既往ノ沿革ヲ略叙スレハ、明治ノ初年 車駕東遷以來、世運大ニ変遷スルニ從ヒ、去ル十二年有志者相議リ、一社ヲ設立シ、官家士族ノ子女ヲ糺合シ、殖産工業ノ道ヲ奨励センコトヲ企画セシニ、畏クモ事

天聰ニ達シ、御内帑ヨリ数万金ノ恩貸ヲ蒙リ、社員奮発努力シ、事業ノ進前稍見ルヘキ者アリシニ、図ラサリキ需用供給其度ヲ失シ、収支相償ハサルノ悲運ニ遭遇シ、十六年遂ニ其事業ヲ停止スルノ已ヲ得サルニ至リ、依テ更ルニ平安義校ヲ設立シ、子弟教育ノ途ヲ開キ、人材養成ノ方針ヲ採リシニ、事再ヒ 叡聞ニ達シ、年々数千金ヲ下賜セラシ、ノ恩命ニ接シ、感發憤励校務日ニ進ミ、数年ナラズシテ生徒ノ数、大ニ増加セリ、若シ夫レ如斯ニシテ進マンニハ、其成績ノ見ルヘキ者アラン、然ルニ当時義校ノ規模甚大ナラス、日進月歩ノ世運ニ伴ナヒ、進ムヘキ資力ニ欠クル所アリ、是ヲ以テ会員中義校ノ設立ニツキ云々スル者少ナカラス、當時政府ニ於テ士族授産金恩貸処分アルニ際シ、時ノ府知事北垣公閣下ノ尽力ニヨリ、官家士族ニ数千金ノ下附ヲ受クルニ至リ、茲ニ有志者相圖リ修交会ヲ組織シ、官家士族ヲ網羅シテ、之ヲ数部ニ分チ、各部ヨリ総代議員ヲ撰出シ、会務ハ総テ衆議ニ因ル

ノ法規ヲ設ケ、会議数回ノ後チ廿五年ニ至リ、更ニ会名ヲ平安義会ト改メ、大ニ規則ヲ修正シ、廿六年七月宮内省ノ承認ヲ經ルニ至レリ、茲ニ於テ故從二位勲二等男爵伊丹重賢氏ヲ會長ニ推挙シ、基礎漸ク緒ニ就キタルヲ以テ、先ツ總會ヲ開キ、平安義校ノ存廢ヲ決議シ、從來困窮セラレタル基金、并ニ現有財産ヲ本会ニ繼承シ、勸学部ヲ置キ、学資補給ノ法則ヲ定メ、普ク會員子弟ヲシテ、自由修学ノ方法ニ拠ラシメシニ、学生ノ数月二年ニ増加シ、殆ント元資ノ利殖ノミニテハ、支アル能ハサルニ当リ、三十一年重テ若干万円ノ下賜金ヲ辱フシ、今ヤ元資ノ総額幾ント拾万円ニ達シ、当初ヨリ学資ノ補給ヲ受ケタル生徒ノ總数千有余名ニ到レリ、茲ニ於テ宣誓ノ式典ヲ举行シ、并ニ會員子弟ノ進学ヲ勸奨シ、併セテ其実績ヲ督励セントス、茲ニ本会ノ沿革ヲ略叙シ、将来ノ企望ヲ述ル如斯、

明治三十四年五月十二日

平安^(マ)義幹事 増沢季の

〔十〕「會長宛宣誓式御臨席願」

發平九〇号按^{本書}

謹啓、時下秋冷相催候ノ処、高門益御清穆被為涉候段、奉欣賀候、却説過日御教示ニヨリ、來ル十月十八日宣誓式举行ノ事モ決定致候、就テハ夫々準備致置候間、御多忙中恐縮ノ至リニ候得共、是非御^(再)臨ノ程、一同希望致候、尚招待員ハ、総長、知事、貴衆議員、各学校長、新聞記者等ニテ、參拾五名以内ニ御座候、尚亦御教示ノ当日御演説ニ

付、別段考案モ無之候得共、別紙要目ハ本会ノ為メ必要ノ件々カト愚考致候間、御參考迄申上候、先ハ右御回答旁々此段得貴意候迄、勿々敬具、

追テ招待状ハ曩ニ電覽ヲ經タル文案ニテ、尤閣下御名前ニテ可差出候、尚幾日頃御出発ニ相成候哉、御決定ノ上ハ至急御報被下度、此段添進申候、

明治三十六年九月

幹事長 増沢季的

会長男爵尾崎三良殿

〔十一〕「浅田暢一答辞」

答辞

秋風將肌ニに逼り、四山の稍間亦た漸やく紅葉を織りなさむとす此時ニ際して、今日只今特に遙かに会長の西下を促がし、我親愛なる平安義会は、此の甚とも盛大にして厳肅なる第二回宣誓式を挙行せらるゝに至りしは、我等の喜びの此ニ如くものなし、況むや周らずに來たる來賓、又たは先輩の方々の臨席の榮を得たるに於てもとや、謹むで慮るに、皇室の本会に對して御思召の特に優渥なるは、今更申すもいと畏く、実ニ我等が心裏に深く刻まれて、身を終ふる迄て、此春窮の皇恩に感激して、万一二奉報せむとする所以なり、

「ナサーニエル、ホウーソン」曾て曰へり「人は皆な此世に於て、各自其居るべきの場所あり、人要所ニ在るを欲すとも、復た欲せずとも、

兎角世界は其場所に其人を必要とす」と実に味ふべき言にあらずや、吾人は吾人の吾にあらず、世界の吾人なり、豈に此要求をして、満足せしめむには、深く思はずして可ならむや、

我か述ふる所、誠ニ拙劣にして、能く我等が意志をして、發表し得ざるを、深く恨む斗りと矣、我等は徒らに言辞を弄するものにあらず、特に其言の足らざるは、以て実行ニよりて補はむ事を期せり、幸に賢察あらむ事を以て、学生々徒一同二代りて、茲ニ謹むで会長の意を對し、宣誓する所以なりとす、

明治三十六年十月十八日

浅田暢一謹言

〔十二〕「明治天皇御大喪ノ義ニ付日記」

七月二十日、日出新聞号外

聖上陛下御不例ノ義拝承スルヤ、直チニ宮内大臣宛

天機奉伺、廿六日理事兼田義路、増沢季的、水口卓哉、左右田忠太郎、

田中省三郎ノ五氏出會協議、本会ヨリ會長代理トシテ理事一名東上、

天機奉伺ノ事ヲ決シ（理事増沢季的君）、其不在中京都ニ於テハ、上下賀茂及御

靈神社、會員代表シテ評議員一同奉拝、御平愉祈願フコト、シ、（幣

帛料ヲ納メ）各理事、其任ヲ分担ス、

七月三十日

聖上陛下 崩御被為遊、東上中ノ理事ニ於テ、御吊詞其他ノ手續ヲ済シ、三十一日理事帰京、

八月四日、本会ニ於テハ、

大行天皇 御真影ヲ奉掲、評議員一同謹而奉訣拝礼ヲ為シ、庭前ニ於テ遙拝ノ式ヲ執行シ、別紙詞表ヲ特別評議員多村知興氏奉読ス、御大喪ニ対シ、御用命ノ惻願書宮内大臣宛提出、右ニ対スル件々ヲ副總裁尾崎男爵ヘ報告ス、

八月十二日

会長服部保親氏外、兼田、畑、左右田、嶺、水上、下橋、小島、井関、川井、中田ノ十氏会合、御用命ノ時ノ人名等ノ下調ヘヲ為シ、御下命ノ時ノ準備ヲナセリ、又華族、管長、門跡等、御通夜許容ニ付、本会ヨリモ別紙ノ如ク御通夜許容相成様ノ惻願書、宮内大臣宛副總裁ヲ經テ提出ス、

八月十七日

宮内省ヨリ書状來着、

別紙ノ如キ詮議及ヒ難キ書面來着、

八月廿一日

川口珍邦、津田永胤両氏、旧非藏人、御使番、仕丁総代トシテ、御用命願書携帯東上、廿四日帰京、東上中ノ報告（即チ願書、提出）、近藤久敬氏ニ面会、委細懇談ノ事、

八月廿八日

今回御用命ノ事ハ、総テ地方官知事江、宮内省ヨリ御命令ノ事ニテ（即チ地方官ヲ經テ出願者多数アリ）、小森猷次、服部保親、畑道名、水口卓哉諸氏、府庁出願別紙ノ如キ人員調書ヲ差出シ、弥割番人員ハ（元非藏人、御使番、仕丁、諸官人、諸太夫侍）等ニ於テ、式拾五名採用卜事ニ決定、

知事ヨリ内命依テ、八月卅日各部ヨリ平安義会へ集合人名確定ノ事ヲ協議セリ、又全日午後六時ヨリ、指定ノ人名集合打合、左記ノ人名ニ於テ御用命ニ応スルコトニ協定ス、

九月一日、服部氏ヨリ注意書、右ノ氏名落選、

九月三日、京都出張所へ御用命ノ人員廿五名、午前七時三十分出頭ノコト、

〔十三〕「明治天皇御大喪ノ義ニ付惻願書」

惻願書

本会ハ曾テ優渥ナル御沙汰ヲ蒙リ、尚特別ナル恩典ニ浴シ、感泣肝銘ニ不堪処々ニ候得者、

大行天皇崩御被為遊候御事ハ、慟天哭地恐懼不能措希クハ、御大喪ニ対スル相当御用拝承、以テ鴻恩ノ万分奉答仕度、會員一同ノ赤誠惻願ニ御座候間、先年

英照皇太后陛下御大喪ノ節、御用被仰付候御先例モ、被為在候義ニ付、何卒右願意御採納被成下度、會員代表茲ニ謹テ惻願仕候也、

大正元年八月四日

宮内大臣伯爵渡辺千秋殿

平安義会々長服部保親

〔十四〕「明治天皇御大喪ノ義ニ付報告書」

報告書

御大喪ニ付、恐懼ニ堪エス、本日平安、桜橋両団体理事、評議員等、

其会員ヲ代表シ、平安義会内ニ於テ、

大行天皇御真影ニ対シ謹テ奉訣拝礼ヲ為シ、更ニ同庭前ニ於テ、嚴肅

ナル遙拝式ヲ執行シ、別紙詞表奉読仕候ニ付、此義其筋へ徹底候様、

御執計被下度、此段御報告旁々御依頼申上候也、

大正元年八月四日

平安義会々々長 服部保親

京都桜橋財団理事長 小森猷次

平安義会副総裁男爵尾崎三良殿

(十五)「明治天皇御大喪ノ義ニ付御高配願」

本会ハ格別御由緒有之候モノ、団体ニテ曾テ優渥ナル御沙汰ヲ蒙リ、

又特別ナル恩典ニ相浴シ居候ニ付、今般

御大葬ニハ相当御用ヲ承リテ、御鴻恩ノ万一ニ奉答度、会員一同切望

ニヨリ、過日会長ヨリ惓願書上呈、尚閣下ヨリ其赤誠徹底候様、御高

配被願出置候処、聞ク所ニヨレハ、同族中有志者ノ名義ニテ、同様ノ

義夙ニ願出居候モノモ有之候由、然ルニ同族中既ニ法人組織モ相整居

候上ハ、今回御用命ノ如キモ、其団体へ被仰付候ハ、諸事公平ノ処

置ヲ取り得ラレ、且ハ将来団体ノ信用モ篤ク、從テ其基礎ノ鞏固ヲ加

フル次第ニ御座候間、此辺御含ミ、此際特ニ御高配相仰度、理事連署

更ニ惓請仕候、謹言

大正元年八月十日

平安義会

会長 服部保親

理事 兼田義路

理事 水上邦直

理事 畑道名

理事 左右田忠太郎

理事 嶺全明

理事 下橋敬長

理事 飼田辰一

副総裁男爵尾崎三良殿

(十六)「明治天皇御大喪御用待命者撰抜方針」

御大葬御用待命者

撰抜方針

一 旧時ノ身分ヲ不論、会員均霑ノ方針ヲ取ル事、

一 成年以上ノ会員（男子）ニシテ、身体壮健、公職其他ノ系累ナリ、

京都及付近交通便宜ノ地ニ居住スルモノ、

但戸主以外ニシテ、本項ニ適當スルモノハ、予備ニ撰抜シ置ク事、

一 御命令アリタル時ハ、理事会ニ於テ、其待命者中ヨリ、随時拔擢ス

ル事、

畑道名

(以下署名省略)

(十九)「明治天皇御大喪ノ義ニ付上申」

(十七)「明治天皇御通夜ノ義ニ付惴願」

上申

御通夜之義ニ付惴願

旧禁裏御内(非藏人、御使貴、仕丁、諸官人、諸太夫侍)
一総員千〇五拾六人

今般首相以下貴顯華族、各宗管長、門跡寺院住職、其他由緒深キ者等
ニハ、御通夜被差許候趣拝承、偏ニ君臣情義御斟酌被為遊候、御聖意
ニ被為出候義ト拝察深感涙仕候、然ルニ本会員中ニハ、旧時親シク禁
裏御所ニ奉仕セシ朝臣及其子孫多々有之、其御由緒ハ最深厚ニ候得者、
本会代表者トシテ一両名御通夜相願度、会員一同切望惴願ニ御座候間、
何卒右御許容被成下度、本会ヲ代表シ、此段惴願仕候也、

右者京都市及京都附近現住者ニ御座候、
右御届仕候也、
大正元年八月廿九日

大正元年八月十二日

平安義会々々長服部保親

京都府知事大森鍾一殿

服部保親
小森猷次
畑道名
水口卓哉

宮内大臣伯爵渡辺千秋殿

(十八)「明治天皇御通夜ノ義ニ付指令第九号」

(二十)「昭憲皇太后御大喪ノ義ニ付惴願書」

惴願書

指令第九号

平安義会

本会ハ曾テ優渥ナル御沙汰ヲ蒙リ、尚特別ナル恩典ニ浴シ候義ニ候
得者、

本月十二日附出願、其会代表者殯宮へ祇候之件、
右難及詮議、

大行皇太后、御大喪ニ際シ、相当御用拝承、万分奉答仕度、会員一同
惴願ノ至リニ御座候、先年

大正元年八月十五日

宮内大臣伯爵渡辺千秋(宮内大臣之印)

明治天皇、英照皇太后
御大喪之節、御用被仰付候御先例モ被為在候義ニ付、何卒右願
意御採納被成下度、茲ニ謹テ惴願仕候也、

大正三年四月十五日

平安義会々々長服部保親

大喪使長官波多野敬直殿

〔二十一〕「昭憲皇太后御大喪ノ義ニ付答弁願」

皇太后陛下 崩御被為在候ニ就テハ、来ル廿五日桃山東陵ニ御大葬被仰出候ニ付、各御由緒ノ廉ヲ以テ、旧地下官人並ニ旧非藏人、使番、仕丁ノ輩ヨリ供奉請願書提出相成候処、平安義会並ニ桜橋財団ヨリモ、相前後シテ願書提出成候テ、大葬使ニ於テ是ヲ一括シ、京都府知事へ採用方依嘱、更ニ府知事ヨリ平安義会並ニ桜橋財団理事ニ、其撰択方委任相成候ニ対シ、理事諸賢御評議ノ結果、第一部ヨリ七名、第二部ヨリ四名、第三部ヨリ七名、第五部ヨリ二名ヲ指定シ、名簿御提出ノ趣、聞及候、然ルニ右御撰択ニ当リ、各部ヲ公平ニセズ、第一部及第三部ハ各七名トシ、第二部ヲ四名トシ、第五部ノ如キハ僅ニ二名ノ少数ヲ採用セラレタルニ止マリ、殊ニ第四部ニ於テハ一名ヲモ採用セズ、除外セラレタルハ、如何ナル理由ニ基クモノナルヤ、府知事ノ内命カ、將タ理事諸君ノ我意乎、府知事ノ内意ニ依ルモノトスレバ、彼レハ吾人ノ權利ヲ蹂躪セルモノ、吾人口ヲ減シ黙々ニ付スル能ハズ、相率ヒテ府知事ニ向テ答弁ヲ求メ置クベキ必要アリ、將又単ニ理事諸君ノ任意撰択ニ依ルモノトスレバ、斯ル不公平ナル撰択方法ヲ以テ、其当ヲ得タルモノト思惟セラル、也、不肖等、曩ニ全族多数ノ依頼ニ依リ、請願書ヲ提出セルニ対シ、連名各位ニ弁明ノ必要アリ、賢明ナル理事

諸君ノ明確ナル答弁ヲ得、相当ナル方法可相講覚悟ニ付、至急御答有之度、終ニ望ミ賢明ナル理事諸君ニ敬意ヲ表シ候、

大正參年五月十一日

小島秀次郎

菅谷寛之

前大路承光

下橋敬長

井関次郎

伊藤倫之

平安義会

理事御中

おわりに

本稿で翻刻・紹介した史料から、あらたに得られた平安義会の宣誓式や、平安義会の明治天皇・昭憲皇太后御大喪への関わりについての知見を整理することで、結びとしたい。

(一)の「宣誓式開催通知」、(二)の「宣誓式出頭通知」、(三)の「学生宛宣誓式開催通知」を見ると、明治二十六年(一八九三)に整えられた平安義会の奨学事業について、明治天皇のおぼしめしと下賜金のおかげであることや、本事業の意義と成果を周知するために、会長尾崎三良臨席のもと、中学以上の学生生徒を対象として、明治三十四年(一九〇二)五月十二日午前九時より同会において第一回の宣誓式を

開催する運びとなったことが分かる。

また、(二)の「宣誓式出頭通知」や(四)の「総代議員宛宣誓式出頭通知」によると、当日は準備のため、役員(幹事・総代議員)は八時までに集合するよう、平安義会副会長代理で幹事の増沢季のより求められている。さらに、役員は京都七条停車場まで会長を迎えるべきこと、知事・学校関係者等を来賓として招待していること、宣誓式終了後に宴会を催すことなども確認できる。これらについては、以下に引用する『尾崎三良日記』⁷⁾にも記載されている。

五月九日 木 曇

午后三時神戸二着、直ニ上陸、三ノ宮停車場ニ至リ、同所三時四十七分發シ京都ニ向フ、六時十五分京都着、烏丸下立売上ル高田茂方ニ投宿ス、少時ニシテ平安義会役員十三人來ル、

五月十二日 日 晴 夕時雨

午前八時平安義会ニ至ル、教育恩賜金ノ補助学生等ノ宣誓式アリ、生徒凡ソ百名、來賓ハ京都府知事高崎、大學書記官森春吉、女子高等學校長其他数名、本会役員数名ナリ、午前九時三十分生徒、來賓ヲ式場ニ列セシメ、聖上、皇后両陛下ノ御真影ヲ掲ゲ一同敬礼、君が代奏樂、会長勅語朗読、宣誓文朗読、生徒惣代答辭、すめらみこと奏樂、閉扉一同敬礼、会長演舌、知事演舌、右了テ生徒ハ別席ニ退キ、右宣誓文ニ署名セシム、來賓ニハ茶菓ヲ呈シ、幹事、総代議員凡ソ二十五、六名、昼餐ヲ為シ、義会経済ノ事ニ付協議ヲ為シ、規則ノ改正ヲ為シ、公債債券等ヲ売払ヒ、確實ナ

ル株券、例ハバ郵船会社又ハ日鉄、九州鉄道等ノ株券ヲ買置ク事ニスル事等当日列席者皆同意ナルニ依リ、近日ノ内総代会及總會等ヲ開キ改正ノ手続ヲ尽ス事ニ決シ、午后三時平安義会ヲ出デ帰宿、増沢宿迄送り來ル、

会長の尾崎三良は、横浜港から海路で神戸港に上陸し、五月九日の夕刻に鉄道で京都七条停車場に着くと、京都滞在中は高田茂方を宿所とし、十三名の平安義会役員に出迎えられている。また、五月十二日の宣誓式当日の様子については、学生生徒の出席者が百名程度で、京都府知事高崎親章等が来賓として招かれていたと記されており、式順も具体的に確認できる。その内容は、(五)の「宣誓式順序」とほぼ同様であるが、学生生徒は退場後に別席で宣誓文に署名したこと、会長と二十五名程度の幹事・総代議員は昼食を共にし、平安義会財産の管理運用や規則改正の手続きについて協議したことなどが、『尾崎三良日記』には叙述されている。なお、(五)の「宣誓式順序」が、明治三十四年・三十六年いずれの宣誓式の式次第かは不明である。

(六)の「宣誓式会長訓示」は、(五)の「宣誓式順序」における「七宣誓文朗読 会長」に相当するもので、①皇室の高恩を心に留め、教育勅語を守り、勤勉・儉約に尽くすこと、②会員の体面を重んじ、自己の修養に努め、国家の利益と国民の幸福の増進を図ること、③平安義会の発展と後進の指導に尽力することが、尾崎三良により訓示・宣誓された。(七)の「本莊謙三郎答辭」では、(六)の「宣誓式会長訓示」に対して、京都帝国大学医科大学生で学生生徒総代の本莊謙三郎が、

訓示の主旨を守ることが宣誓している。年月日未詳ではあるが、(十二)の「浅田暢一答辞」が明治三十六年の宣誓式における答辞であることから、こちらは明治三十四年の宣誓式のものと考えるのが自然であろう。

(八)の「宣誓式当日報告」は、(五)の「宣誓式順序」における「十一幹事本会貸給費生ニ関スル報告」に相当するもので、会員子弟への学資補助には、給費と貸費の二種が存在したことが分かる。このうち給費は、山城国内の小・中学校、商業・美術工芸学校、高等女学校に就学の生徒に対する学資補助で、十年間に千七百九十余名がこれを受けている。一方の貸費は、各帝国大学、各高等学校等に就学の学生に対する学資補助で、十年間に九十八名がこれを受けている。(九)の「平安義会沿革」は、明治三十四年の宣誓式に際して、会員子弟の進学を奨励し、その実績を奨励するために、平安義会の沿革を略述したものである。「平安義会沿革」の叙述の仕方は、旧稿⁽⁸⁾で翻刻・紹介した「平安義会沿革概略」に通ずるものがある。(五)の「宣誓式順序」には、宣誓式のなかで同会の沿革が説明された形跡はないものの、「十一幹事本会貸給費生ニ関スル報告」に付随して、これを叙述した幹事の増沢季的により、「平安義会沿革」の内容が披露された可能性はあろう。

(十)の「会長宛宣誓式御臨席願」では、明治三十六年(一九〇三)十月十八日に、第二回の宣誓式を開催すること、第一回の宣誓式と同様に、会長の臨席が希望され、総長・知事・貴衆議員等をはじめとする三十五名以内の来賓を招待することなどが、尾崎三良に伝えられている。これらについても、以下に引用する『尾崎三良日記』⁽⁹⁾に記載が

ある。

十月十六日 金 晴

午前七時出門、新橋停車場七時三十分発シ、京都ニ向フ、一等客車旅客咽吸煙者多ク、頗ル困難ヲ極ム、午后八時三十八分、期ノ如ク京都着、腕車ニテ高田茂方ヘ投ズ、老夫婦出迎フ、待遇厚シ、

十月十八日 日 晴

午前九時、フロックコート腕車出門、平安義会ニ至ル、学生宣誓式ヲ行フ、学生凡ソ七、八十名、来賓ニハ主殿寮中川助及属官、代議士、義会^(長)役凡ソ三十名、式ハ総テ前例ノ通り、前十一時式ヲ了リ、来賓ニハ茶菓ヲ饗シ、午十二時、役員凡ソ三十名宴会アリ、天皇、皇后両陛下万歳ヲ三唱シ、午后一時散会、

これによると、第二回の宣誓式は、学生生徒の出席者が七・八十名程度で、主殿寮中川助及属官・代議士等三十名程度の来賓が招待されている。また、式順は明治三十四年の前例通りであったことや、式後に三十名程度の役員との宴会が催されたことも確認できる。先述したように、(五)の「宣誓式順序」は、明治三十四年・三十六年いずれの宣誓式の式次第かは不明であるが、どちらのものであるにせよ、第一回・第二回宣誓式の式次第は、基本的に同じ内容であったと考えて差し支えなからう。以上が本稿で翻刻・紹介した史料から、あらたに得られた平安義会の宣誓式に関する知見である。

つぎに平安義会の明治天皇・昭憲皇太后御大喪への関わりについての知見を整理する。(十二)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付日記」七月二十日条からは、明治四十五年(一九一二)七月二十日の『日出新聞号外』で、明治天皇の御不例が報じられると、天機奉伺のため平安義会会長代理として理事増沢季的が七月二十六日に東上し、京都では同会評議員一同が上下賀茂神社と御霊神社を奉拝し、天皇の平癒を祈願したことが分かる。また、七月三十日条には、大正元年(一九一二)七月三十日に明治天皇が崩御すると、増沢季的が御吊詞などの手続きを終えて、翌三十一日に帰京したと記されている。

(十二)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付日記」八月四日条(十三)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付願書」により、明治天皇の嫡母である英照皇太后が、明治三十年(一八九七)に崩御した際、御用命を受けた先例を根拠として、明治天皇崩御に際しても、御大喪において平安義会会員に相当の御用命をいただきたいと、同会会長の服部保親が、八月四日付で宮内大臣宛に願書を提出したことが確認できる。加えて(十四)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付報告書」によると、八月四日、平安義会と京都桜橋財団の理事・評議員等が、それぞれの会員を代表し、平安義会内において明治天皇御真影に奉詠・拝礼を、同庭前において遙拝式を執行し、特別評議員多村知興が祝詞を奉読したという。平安義会と京都桜橋財団が、ともに奉詠式と遙拝式を執行しており、これを平安義会副総裁尾崎三良に報告している。この奉詠式と遙拝式については、『日出新聞』にも以下のような記事がある¹⁰。

●平安義会奉詠式 旧官家士族の団体なる平安義会は、皇室と深き御縁故あり、特別を以て先帝御在世の砌、両陛下の御真影を下し賜ひたるが、恐れ多くも今回先帝崩御遊ばされたるに就て、一昨日午前九時より服部会長以下評議員一同は、先帝の御真影を奉掲して奉詠式を行ひ、夫れより同会の庭園に新しき莖を敷き、東京宮城の方に向つて遙拝式を行ひ、田村上賀茂神社宮司詞表を捧読して、静肅に式を終りたるが、更に平安義会員一千十三名全部を不日召集して奉詠式を行ふ事としたり、又同会内の桜橋財団理事服部保親、小森猷次の二氏より、先帝の崩御は実に恐懼の至りに堪えず、殊に我財団は皇室に對し奉り、特別に縁故深ければ、御大葬に關し相當の御用命を蒙り度旨、宮内大臣へ請願書を総裁大森知事を経て昨日提出したりと、

ここからは、大正元年八月四日午前九時より、御真影を奉掲して奉詠式、東京宮城に向かつて遙拝式を執行したこと、上賀茂神社宮司田村氏(平安義会特別評議員の多村知興)による祝詞の奉読が行われたこと、後日、平安義会会員千十三名全員を招集して奉詠式を行う計画であること、明治天皇御大喪において、京都桜橋財団に相當の御用命をいただきたい旨を、八月五日付で同財団総裁の大森鍾一京都府知事を通じて宮内大臣へ請願したことなどが確認できる。

ところで、(十四)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付報告書」では、尾崎三良の肩書きが平安義会副総裁となっており、会長は服部保親である。話は少し脱線するが、尾崎三良から服部保親への会長交代について、

『尾崎三良自叙略伝』^①にその経緯が詳述されているので、やや長文になるが以下に引用する。

平安義会会長辞任更に副総裁となること

明治四十四年五月、平安義会会長を辞任することとせり。是は別に深き子細あるにあらず。本会の事業も追々整頓し、社団法人の組織も完成し、所在地不動産も本会のものと確定し、資金も漸次豊富に為り、前途予を必要とせざる情態に在り、又一には予も漸次老齢に傾き、社団法人の理事長として財産管理計算を監督すること甚だ面倒なるのみならず、遠地に在つては他の理事と会することも少なく、自然情誼の疎通を欠く恐れあり、依つて断然之を辞したり。然るに他の理事及び評議員等は予の此辞任を意外のことと非常に驚き、百方苦思して之を思ひ止まんことを懇請したれども、一旦決心したる故之を留まらず。理事等は其では先づ御預り置き、評議員会に之を謀るべしとのことなりし。予は其儘一旦東京へ帰りたり。其後一月程経て増沢幹事長態々東上、今度は評議員会の決議を以て留任を懇請し彼の辞表を返戻し来りたれども、予固く取つて動かざりければ、今度は趣向を替えへて会長としての留任は迎も出来ざるも、此長き深き関係のある予を全く義会と離れしむるは如何にも忍びざるの情ありとて、定款を改正し総裁、副総裁を会長の上に置き、且つ法律上の責任なきものとして之を任じたらば承諾するや否やとのことに付き、予は之に答へて、諸君が夫程までにして予を待遇せんとする其厚誼は深く謝

する所なり、依つて此義は敢て辞せずと云ひたらば、夫が為め態々定款を改正し、総裁、副総裁を置き、総裁には皇族を推戴することとし其筋の認可を受け、評議員会に於て予を副総裁に推薦したり。

愈々会長退任と確定したとき、評議員会の決議を以て左の感謝状を増沢幹事長総代として東上齎し来る。

平安義会感謝状

我平安義会は、畏敬信頼せる会長男爵尾崎三良君閣下の退任せらるるに際し惋惜の至りに堪へず。謹んで茲に鄙辞を呈し、以て感謝の微意を表せんとす。顧ふに明治維新百度更革、同族中劇かに世祿を失ひ往々流離困憊の域に陥らんとするものあるに際し、故三条実美、岩倉具視両公爵閣下の内旨を体し、特に上皇室の優渥なる恩賜を忝うするを以て之を基礎とし、殖産興業爾他教育の方途を建て、孜々其体面の保持を講じ、大なる失態なく、一面有為の人材を出し国家に貢献するもの尠からざるに至りしは、偏に是れ閣下が鋭意同族の補導に励め、幾多の心力を竭されたる結果に外ならず。加之閣下の十有余年会長の重任に膺り、懇篤本会発展に資せられたるは同族の深く感佩する所なり。因つて茲に満腔の誠意を披瀝して閣下の功勳を謝し、且つ不腆の物敢て之を座右に献ず。請ふ之を諒納し以て永く記念せられんことを。且つ本会評議員会は、此際閣下を名誉会長に推薦すべく決議したれば、仰ぎ願はくは閣下の之を承認し、本会向後の発展に資益せられんことを希望の至りに堪へず。恐懼

再拝

明治四十四年八月廿七日

平安義会会長 服部保親

男爵 尾崎三良殿

此感謝状の中に予に物品を贈るの文あり。理事長は予に理事一同の伝言を述べて曰く、評議員会の決議に依り理事に一任せられ、理事一同に於ては記念の爲め屏風一双を贈ることに決し、而して其屏風には当世の画工に命じて画かせる積りなれば、其画様に付いて予の趣味に適するものを選択する積りなれば内々予の適意のものを漏されし、是れ理事一同よりの情望なりと。予之に答へて曰く、感謝状は敢て当らずといへども、諸君の厚意を永く記念するの爲めに辱く收受すべしといへども、物品の贈遺は固く辞拒する旨を述べて其目録を返付す（其目録は大奉書三つ折にして、中央に屏風一双と大書したるものなりし）。感謝状に対する答礼書を左に掲ぐ。

感謝状に対する答礼書

拝啓残暑難去候処、各位愈御壮栄珍重奉賀候。然らば今般小生会長理事辞任致候に付いては、理事増沢季的君態々東上、御懇篤鄭重なる感謝状御贈典相成、小生敢て当らずといへども折角の御懇情に付き辱く拝受、永く記念可致候。乍去物品の報酬を受けては心中安からず、本々義会創立前より諸君と同郷の情義上浅からざる関係もあり、且つ諸君の御推薦に依り是迄微衷を尽したる義に有之、然るに今之が爲め報酬を受けては折角の衷

情も減却し、就ては聊かながら從來尽したる誠意も徒爾に属するの感あり、甚だ遺憾に存候に付き右物品は謹んで御返戻致候間、此段不悪御諒承相成度候。猶委細愚衷の趣は増沢君へ得貴意置候。先づは右感謝状御挨拶且つ物品報酬辞退の爲め一書呈上仕候也。草々敬白

明治四十四年九月十七日

尾崎三良

平安義会理事御中

右にて予の平安義会に関することは先づ大段落を付けた（尤も未だ全く関係を離れたりと云ふ訳にはあらず）。

予が会長を辞任し、其保管する所の有価証券を引継ぎたるときは、之を時価に積り無慮十六、七万円ありし。其後明治四十五年三月（即ち予会長を退き七、八ヶ月後の事なりし）、郵船会社の株券三百株を三万五千余円に売払ひ得たる利益金約壹万參千円（郵船会社株は其後騰貴して其新株と共に一株五百円以上になりたり。即ち三百株にて得べき利益は十万円以上なりしに、惜むべし予の退きし後すぐに此事を行ひたりしは残念なり）。大正三年に玄武町地所千四百六十九坪を三万五千九百円に売払ひ得たる利益金三万円余あり。是等の利益金を従來の資金に合算し現今の同会所有動産（即ち有価証券、預金、現金等）約二十一萬四、五千円余、之に不動産の価額を合算するときは二十七、八万円、猶之に郵船会社株売買にて得べかりし利益を合するととき優に四十万円近きの財産と認め得べかりしなり。（後略）

以上の叙述によると、明治四十四年（一九一）五月、会長辞任を申し出た尾崎三良に対して、幹事長の増沢季のが定款を改正して新たに総裁（皇族を推戴）・副総裁を置くことを提案し、尾崎に副総裁を打診すると、尾崎もこれを了承している。これにともない、平安義会・京都桜橋財団両方の設立にも尽力した服部保親が、平安義会会長に就任したようである。

先述の通り、（十四）の「明治天皇御大喪ノ義ニ付報告書」では、平安義会と京都桜橋財団が、ともに奉詔式と遙拝式を執行しており、平安義会会長の服部保親と京都桜橋財団理事長小森猷次が連名で、これを平安義会副総裁尾崎三良に伝達している。明治四十二年（一九〇九）十二月における京都桜橋財団の設立の経緯は旧稿^②で詳述したが、その後の平安義会と京都桜橋財団との関係については触れていなかった。

先に引用した『日出新聞』大正元年八月六日の記事では、「同会（平安義会）内の桜橋財団」との表現が見られるが、『旧桜橋財団関係資料』文書番号一九「本団事務所敷地ニ係覚書」に収められた書類のなかに、両団体の事務所に関する取り決めが綴られているので、これを（二十二）「平安義会・京都桜橋財団事務所敷地に関する覚書」として紹介する。

（二十二）「平安義会・京都桜橋財団事務所敷地に関する覚書」

覚書

第一項 京都桜橋財団ハ、其事務所建築ノ為メ、平安義会ノ所有スル

京都市上京区今出川通寺町西入常盤井殿町五百四拾参番地ノ内、其東南一隅ノ地ヲ借用スルモノトス、

第二項 京都桜橋財団ハ、前項借用地ノ内、道路拡築ノ為メ、京都市ノ予定スル買取地ヲ除クノ外、大約式百有余坪（別紙略）ニ対シ、壹ヶ年壹坪ニ付、金五拾銭ノ割ヲ以テ、毎年六月、十二月ノ両回ニ、其半額宛ヲ平安義会ニ支払フモノトス、

第三項 前項賃借料支払義務ノ発生ハ、京都桜橋財団カ其事務所建築設計ニ対シ、評議員会ノ決議ヲ経テ、総裁ノ承認ヲ得タル日ノ翌日トシ、爾後満式拾ヶ年間ヲ借用ノ期限トシ、満期後ハ、両団体協議ノ上、更ニ継続ノ契約ヲ締結スルモノトス、

第四項 第一項ノ借用地ニ係ル一切ノ公課ハ、平安義会ニ於テ負担スルモノトス、

第五項 第一項ノ借用地内ニ存在スル大木ハ、成ルヘク之ヲ保存スル方針ヲ以テ建築設計ヲ為シ、已ムヲ得サルモノニ限り、平安義会ノ承認ヲ得テ、之ヲ伐採スルモノトス、

第六項 第一項ノ借用地ヲ区画スル塀牆、及ヒ中門ハ、京都桜橋財団ノ経費ヲ以テ、之ヲ移転又ハ改造スルモノトス、

第七項 前項ニ依リ、移転改造シタル塀牆ノ内、南西方ノ兩部分ハ、京都桜橋財団ニ於テ保存修理ヲ負担スルモ、北東方ノ部分ハ、借用地外ニ属スルヲ以テ、平安義会ニ於テ、其保存修理ヲ負担スルモノトス、但両団体カ各其必要上裝飾ヲ施スノ工費ハ、各其負担トス、

第八項 京都桜橋財団ハ、其事務所新築ノ計画ヲ決定シタルトキハ、

多年借用シ来リタル平安義会ノ茶席等ニ修理スルノ経費（金四百円）ヲ負担シ、聊カ報償ノ誠意ヲ表スルモノトス、

第九項 前項ノ修理及移転ノ設計及施工ノ方法ハ、両団体理事ノ協議ヲ以テ決行スルモノトス、

第十項 本契約ハ、追テ両団体ニ於テ其評議員会ノ可決シタル時ニアラサレハ、其効力ヲ有セス、前項ノ決議ヲ經タルトキハ、公正証書ヲ作製シ、各一本ヲ領置スルモノトス、

右契約ヲ協商可認シ、爰ニ平安義会理事、及京都桜橋財団理事、各署名捺印ス、

大正五年九月參日

平安義会理事

浜岡光哲（印）

左右田忠太郎（印）

小島秀次郎（印）

大国弘吉（印）

若杉保定（印）

京都桜橋財団理事

莊林維新（印）

この書類は、あくまでも大正五年（一九一六）九月三日に交わされたものであり、それ以前の両団体の事務所を取りまく状況については不明であるものの、京都桜橋財団が、平安義会の所有する常盤井殿町（旧二条邸）の東南一隅を借用して、ここを事務所としていたことや、

その契約内容の詳細が分かる。

さて、話を元に戻すが、（十五）の「明治天皇御大喪ノ義ニ付御高配願」を見ると、明治天皇御大喪において相当の御用命をいただきたいとの願い出は、平安義会や京都桜橋財団のような法人組織以外の同族中有志者名義でも、個別に申請されていたことがうかがえる。そこで、こうした御用命は平安義会のような団体宛になされるべきであることについて、大正元年八月十日に同会会長服部保親以下理事八名が、副総裁尾崎三良の御高配を賜りたいと願い出たようである。

（十二）の「明治天皇御大喪ノ義ニ付日記」八月十二日条によると、同日に服部保親等十一名が会合し、御用命をいただいた際の準備として、人名などの下調べを行っている。また、（十六）の「明治天皇御大喪御用待命者撰抜方針」では、御大喪御用待命者の選抜方針が、①かつての身分は問わず平等に扱うこと、②成年以上の会員（男子）で京都周辺居住者とする、③御用命があれば待命者のなかから理事会が随時抜擢することと取り決められている。（十七）の「明治天皇御通夜ノ義ニ付個願」と（十八）の「明治天皇御通夜ノ義ニ付指令第九号」からは、平安義会会員にはかつて禁裏御所に奉仕した朝臣やその子孫が多いため、八月十二日付で宮内大臣渡辺千秋宛に代表者一兩名の殯宮祇候を切望したものの、この願いは認められなかったことが確認される。なお、（十二）の「明治天皇御大喪ノ義ニ付日記」八月十七日条によると、同日に八月十五日付の（十八）の「明治天皇御通夜ノ義ニ付指令第九号」が届いている。

（十二）の「明治天皇御大喪ノ義ニ付日記」八月二十八日条を見ると、

御大喪御用命については、宮内省から地方官・知事へ指令がなされるため、京都府庁に人員調書を提出し、京都府知事より平安義会からは二十五名を採用するとの内命があつたようである。(十九)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付上申」は、こうした経緯のなかで作成・提出されたものと考えられる。また、(十二)の「明治天皇御大喪ノ義ニ付日記」八月三十日条では、平安義会の各部(第一部非蔵人・北面・使番から第七部社家まで)より選抜する人名を協議・確定したこと、九月三日条からは、同日午前七時三十分には御用命の二十五名が、京都出張所へ出頭するよう命じられたことが分かる。

なお、大正三年(一九一四)四月十一日に昭憲皇太后が崩御した際も、英照皇太后・明治天皇御大喪に当たり御用命を受けた先例を根拠として、昭憲皇太后御大喪において平安義会会員に相当の御用命をいただきたいと、(二十)の「昭憲皇太后御大喪ノ義ニ付願書」が、四月十五日付で同会会長服部保親より大喪使長官波多野敬直宛に提出されている。ただし、(二十一)の「昭憲皇太后御大喪ノ義ニ付答弁願」によると、昭憲皇太后御大喪については、大喪使から京都府知事へ採用方が依頼され、知事から平安義会・京都桜橋財団理事に供奉者の選抜方針が委任されているものの、理事が第一部(非蔵人・北面・使番)七名、第二部(仕丁)四名、第三部(諸官人)七名、第五部(撰家以下公卿家家来)二名を選抜したことに対して、各部の公平性が保たれていないとの不満が寄せられたことも確認できる。以上が本稿で翻刻・紹介した史料から、平安義会の明治天皇・昭憲皇太后御大喪への関わりについて、あらたに得られた知見である。

注

- (1) すでに、「平安義会沿革概略」の翻刻と官家士族の先行研究―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(二)―(『駒沢女子大学研究紀要』二四、二〇一七年)、「由緒沿革誌其ノ四」の翻刻と平安義校―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(二)―(『駒沢女子大学研究紀要』二五、二〇一八年)、「由緒沿革誌其ノ一」の翻刻と平安義会の沿革―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(三)―(『駒沢女子大学研究紀要』二六、二〇一九年)、「由緒沿革誌其ノ二」の翻刻と平安義会への授産金引継―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(四)―(『駒沢女子大学研究紀要』二七、二〇二〇年)、「由緒沿革誌其ノ二」の翻刻と平安義会の社団法人化―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(五)―(『駒沢女子大学研究紀要』二八、二〇二一年)、「旧桜橋財団関係資料」の翻刻と京都桜橋財団の設立―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(六)―(『駒沢女子大学研究紀要』二九、二〇二二年)を発表している。あわせて参照されたい。

- (2) 詳細は注(1) 拙稿(二〇二〇)を参照のこと。
(3) 詳細は注(1) 拙稿(二〇一九)を参照のこと。
(4) 詳細は注(1) 拙稿(二〇二二)を参照のこと。
(5) 詳細は注(1) 拙稿(二〇二二)を参照のこと。
(6) 拙稿以外の平安義会に関する先行研究には、小林文広『明治維新と京都―公家社会の解体―』(臨川書店、一九九八年)、山下奈

津美「平安義会のあゆみ―二條家と同志社をつなぐもの―」（『同志社大学歴史資料館館報』一一、二〇〇八年）がある。

- （7）伊藤隆・尾崎春盛編『尾崎三良日記 下巻』（中央公論社、一九九二年）。

- （8）注（1）拙稿（二〇一七）。

- （9）注（7）同書。

- （10）『日出新聞』大正元年八月六日（二面）。

- （11）『尾崎三良自叙略伝 上巻』（中央公論社、一九七六年）。

- （12）注（1）拙稿（二〇二二）。

